

## 荊州地区における楚俑についての一考察

小澤 正 人

### はじめに

戦国時代から前漢時代の長江中流域では、地中深くに密閉された墓葬構造のため、保存の良好な墓葬が多数発見されている。著名な湖南省馬王堆漢墓、湖北省鳳凰山168号墓などでは、通常ならば腐食してしまうような漆木器、衣類などが埋葬時そのままに出土している。多量の竹簡が出土した湖北省荊門市の包山2号墓もそのような墓葬の1つである。

この包山2号墓からは、特徴的な2体の木俑が出土している(第2図1・2)。本来あったと思われる着衣は残念ながら腐食していたが、頭部には編み込んだカツラが残っていた。なによりも高さが1m以上あり、それまで出土した戦国時代の木俑の中では群れを抜く大きさであった。

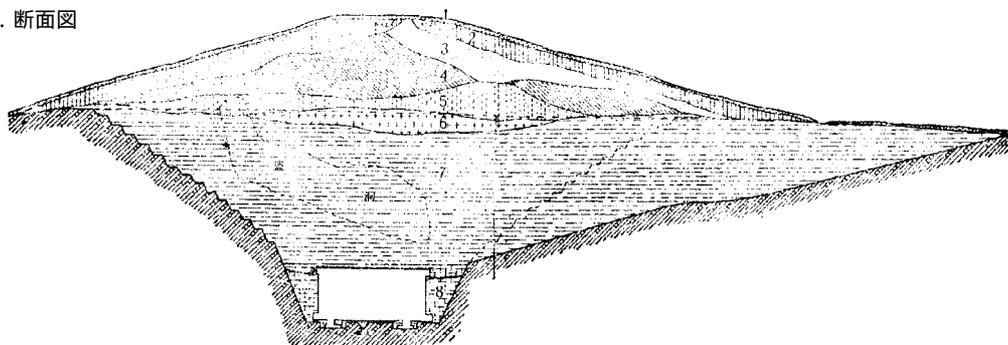
本稿の目的はこの包山2号墓出土の木俑の位置づけを、戦国時代の楚の中心地であった荊州地区<sup>1)</sup>における木俑と関連づけながら検討することにある<sup>2)</sup>。楚の木俑については歴史的な意義を松崎つね子氏が、芸術的な意義を于保田氏がそれぞれ論じておられる<sup>3)</sup>。本稿ではこれら先学の成果を基にしながら論を進めてゆくこととする。

### 1 包山2号墓と出土木俑

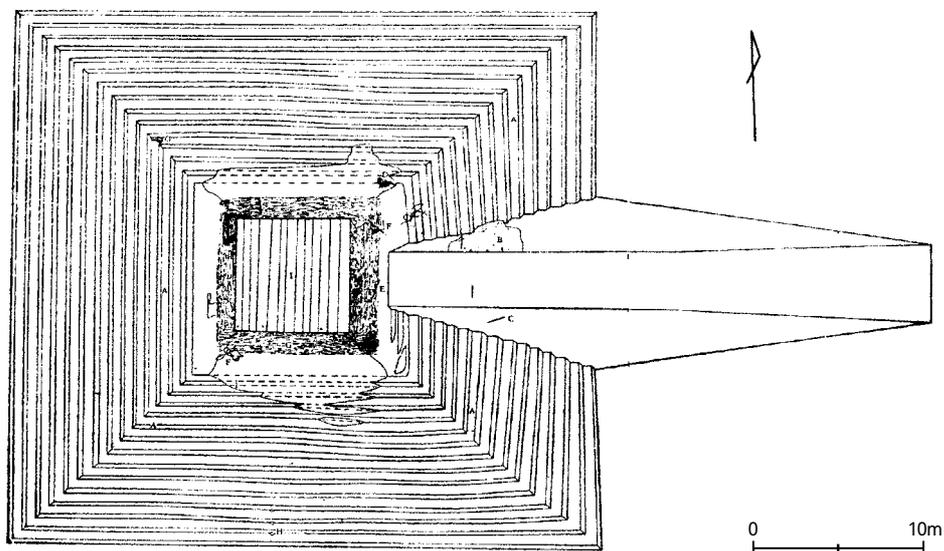
まず本稿で扱う木俑を出土した包山2号墓について概観する(第1図)。

包山2号墓は1986年に鉄道建設に伴い調査された。墓葬は丘陵上に位置し、

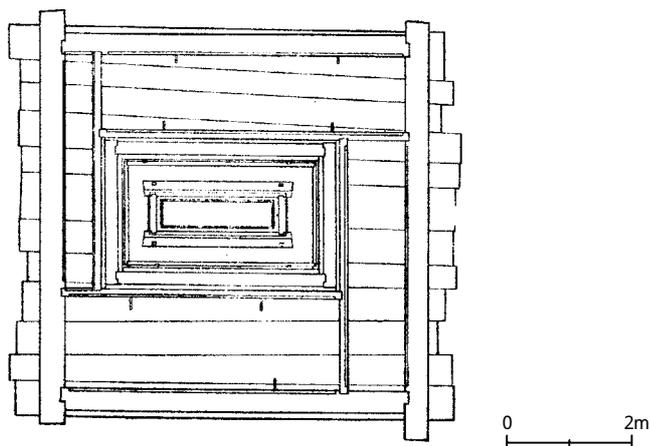
1. 断面図



2. 墓坑平面図



3. 槨室と木棺



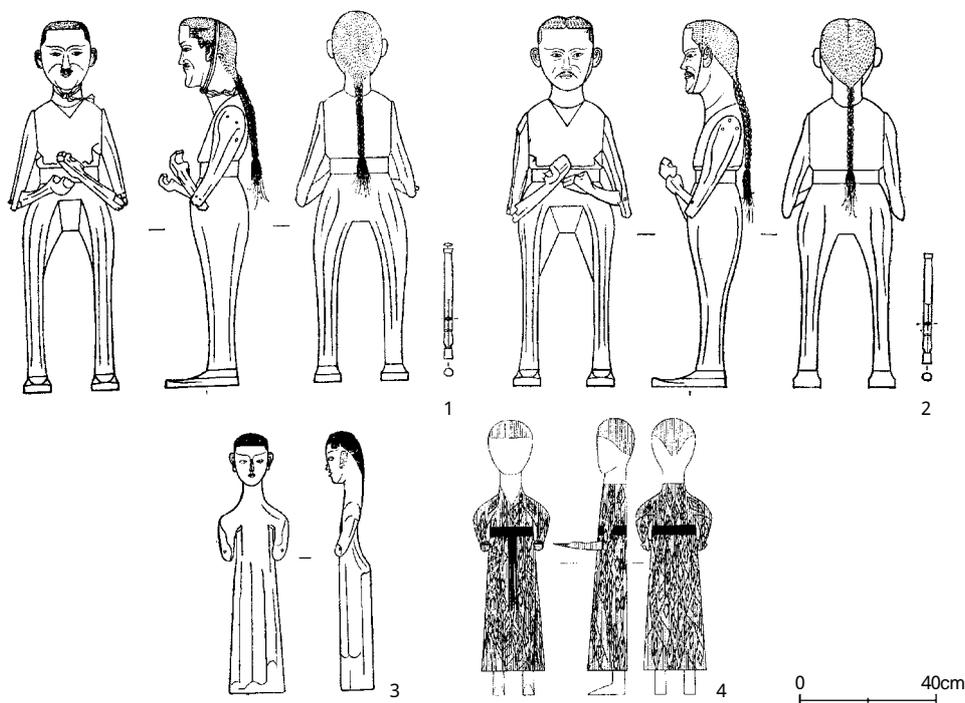
第1図 包山2号墓の構造

2号墓のほかにも規模が比較的大きな墓葬4基がまとまって墓地を形成しており、2号墓はその中でも最も規模が大きい墓葬であった。墳丘底部は円形で、日中戦争中に日本軍が塹壕を掘るなどして破壊されているが、それでも発掘時には底径54m、高さ5.8mが残っていた。墓葬には盗掘坑が発見されたが、墓室まで達せずに放棄されており、盗掘を免れている。墓坑は開口部で東西長34.4m、南北幅31.9mを計り、底部に向かい傾斜する。墓坑深さは12.45mあり、14段の台階が設けられている。墓底では東西長7.8m、南北幅6.85mを測る。また東側には墓道が敷設されている。墓道は平面長で19.8m、斜面長で32.8mを測る。幅は墓道口部分で4.65m、墓坑との接続部で上部10.2m、底部3.2mを測る。墓室内には木槨が置かれている。墓坑は基本的には五花土で埋められているが、木槨は青灰土で包まれている。木槨は長さ6.32m、幅6.26mで、ほぼ正方形になっている。中央の棺室に木棺が安置され、その周囲には副葬品を納めるために東室・南室・西室・北室の4室が設けられている。出土した副葬品は竹簡・木牘を含まない数で1935点であった。

包山2号墓の規模は、荊州地区の春秋戦国時代の墓葬で最大の天星観1号墓に次ぐものであり、天星観2号墓、望山1号墓などとともに中型墓に分類される<sup>4)</sup>。

包山2号墓からは木俑12点が出土しているが、このうち10点は高さ55cm前後で脚部を彫らない「無腿俑」だが(第2図3)、本稿で扱う高さ1mを超えるものは脚部を作る「有腿俑」で、2点が出土している。(第2図1・2)

この有腿俑2点はほぼ同型である。全体はいくつかの部分に分けて製作されている。製作にあたっては頭部、身体部から脚部までを一木で彫りだし、それに別に作った腕部・つま先部を接合している。頭部から肩部までは精緻に彫刻されるが、それ以下はかなり粗雑な作りとなっている。腕部は上腕部と肘先部が別個に作られており、肩部と上腕部は3つのほぞで、上腕部と肘先部は1つのほぞで組み合わせられている。頭頂部は墨で塗られ、さらに髪がつけられる。髪は頭部で2つに分けられ、頸部では3本に編まれ、それを1本に編み込んで、腰部付近まで伸びている。髪は木片につけられ、木釘で頭部に固定されている。同様な方法で髭もつけられている。頭部は眼・鼻・口を彫刻するが、耳は別作りである。眉は墨で描かれ、唇も赤く塗られている。脚部とつま先部の接合部分には斜方格文が彫られ、足先は墨で塗られて靴が表現されている。体部は先端部以外は彩色などがなされておらず、本来は着衣があったと考えられる。着



第2図 包山2号墓出土俑と一般的な木俑  
 (1: 包山2号墓・遺物番号 17 1: 包山2号墓・遺物番号 34 3: 天星観2号墓)

衣から露出する顔面部，頸部，つま先部などは赤彩が施されている。手の先は胸の前で生まれ，先端は溝状になっており，同時に出土した木剣が握られていたと考えられている。木剣は長さ 33cm を測る。2 体の有腿俑のうち第 2 図 1 は高さ 111.8cm，肩幅 35cm，2 は高さ 112cm，肩幅 37.4cm を測る。1 の俑は頭部から頸部に紐がかけられており，頸部前面で結ばれている。第 2 図 3 の包山 2 号墓出土無腿俑は高さ 54.4cm，4 の天星観 2 号墓出土俑は高さ 60cm を測り，いずれも楚の木俑としては標準的な大きさのものである。この比較からもわかるように，包山 2 号墓出土の有腿俑はかなり大型である。

以上が包山 2 号墓と出土した有腿俑の概要である。次に荊州地区における楚の木俑を検討してみたい。

## 2 楚の木俑

第 1 表は荊州地区でこれまで出土が報告されている木俑を時期別・出土墓葬

荊州地区における戦国楚俑についての一考察

時期	墓葬	出土点数	図版番号	分類	形態上の特徴	大きさ	
前期後半	紀城 1号墓	2点	3-4	A類	同型。拱手俑。つま先別作り。着衣彩画	66.7・67.0	
	雨台山297号墓	2点					
	雨台山306号墓	2点					
	雨台山323号墓	2点					
	雨台山336号墓	2点					
	雨台山344号墓	2点					
	雨台山354号墓	8点	3-15	B類	頭部カツラ。上腕部に小孔	54.6	
中期前半	雨台山21号墓	2点		A類	同型。拱手俑。つま先別作り。着衣彩画	39.0	
	車槽 1号墓	2点	3-24	B類		46.0	
	天星観 2号墓	立俑 8点	3-1	A類	拱手。つま先別作り。着衣彩画。	56.0	
			3-2	A類	伸手。肘先・つま先別作り。着衣彩画	58.6	
			3-3	A類	伸手。肘先・つま先別作り。着衣彩画	59.4	
			その他		拱手 2点。3-1と同型 伸手 1点。3-2と同型。	57.3・46.2 46.8(残)	
			座俑 2点	3-9	B類	腕部別作り。着衣	44.8
		3-10	B類	腕部別作り。着衣	45.7		
	望山 2号墓	16点	4-1	B類	同型。伸手俑を含む。肘先別作り。絹のカツラ。着衣	67.0	
	包山 1号墓	7点	3-23	B類	上腕部に小孔	55.3・56.0・56.4・ 56.6・58.5	
	包山 2号墓	有腿 2点 無腿 10点	2-1	B類	頭部カツラ。腕部別作り。剣が付属	111.8	
			2-2	B類	頭部カツラ。腕部別作り。剣が付属	112.0	
			3-21	B類	上腕部に小孔。剣が付属	52.3・53.0・53.6・ 54.0・54.8・56.0・	
	包山 4号墓	3点	3-18	B類	綿のカツラ。上腕部に小孔。剣が付属	68.0(残), 2点残	
	包山 5号墓	2点			剣が付属	残	
	雨台山168号墓	2点					
	雨台山186号墓	2点	3-7	A類	拱手俑。着衣は彩画	45.4	
			3-8	A類	伸手俑。着衣は彩画。肘先は別作り	46.4	
	雨台山222号墓	2点					
	雨台山245号墓	2点					
	雨台山478号墓	3点					
	雨台山535号墓	2点					
	九店 8号墓	1点				46.2	
	九店26号墓	2点				46.0	
	九店451号墓	2点	3-22				
	九店542号墓	2点					
	九店632号墓	5点					
	武昌義地6号墓	2点	3-5	A類	腹前で拱手。つま先別作り。着衣彩画。	56.6	
			3-6	A類	胸前で拱手。つま先別作り。着衣彩画。	52.5	
		2点	3-16	B類	伸手俑	33.0	
			3-17	B類		34.0	
		十里磚廠 1号墓	6点	3-19	B類	表面に絹の残片	58.0・4.8
郭店 1号墓		4点	3-20	B類		55.0	
大暉観 6号墓		2点	3-28		拱手俑と垂手俑。詳細不明	28.0	
雨台山532号墓		2点	3-25		頭部と体部は別作り。頭部カツラ	46.0	
中期後半		雨台山555号墓	6点				
		馬山 1号墓	着衣俑 4点	3-14	B類	同型。手足なし。頭部カツラ	57.5-60.5
			彩画俑 4点	3-30	C類	同型。手足なし。頭部カツラ。胸部彩色	29.8
		九店13号墓	2点				47.0・48.5
	九店17号墓	4点					
	九店51号墓	2点	3-26		着衣。上腕部に小孔	44.0・43.0	
	九店77号墓	1点				46.5	
	九店295号墓	2点	3-27			41.8・42.4	
	九店410号墓	6点	3-11		絹の着衣。頭部カツラ。	60.4	
			3-12		彩色のある着衣。上腕部に小孔	60.4	
			3-13		刺繍のある着衣。頭部カツラ	50.2	
			その他			50.2・60.6・61.4	
	九店447号墓	2点				54.5・56.0	
	九店642号墓	2点				50.0・52.0	
	九店711号墓	4点				50.0・51.0	
	九店712号墓	2点				47.0・57.0	
	九店732号墓	2点					
	九店744号墓	3点					
後期前半	九店483号墓	3点					
不明	雨台山387号墓	2点					

第 1 表 荊州地区出土の木俑

ごとにまとめたものである。調査報告の中には出土点数のみが報告されたり、記述のみといったものもあり、やや空欄が目立つ表になっている。

これまで報告されている木俑は 168 体に達している。このうち座俑は 2 点のみであり、その他の木俑はすべて立俑である。法量については不明なものが多いが、現状では最小のものが十里磚廠 1 号墓出土の 4.8cm、最大のが包山 2 号墓出土の 112cm である。ただし 10cm ごとでみると、70cm 以上が 2 点、60cm 代が 10 点、50cm 代が 43 点、40cm 代が 16 点、40cm 未満が 10 点と、50cm 代を中心としていることがわかる。最大の包山 2 号墓有腿俑に次ぐ大きさの木俑は包山 4 号墓出土俑で高さは 68cm であり、大きさの点で包山 2 号墓有腿俑は突出している。

次に表現上の特徴であるが、出土した木俑のうち、実測図・写真などがあり全体像がわかるものは第 2・3・4 図にあげた 33 点である。本稿ではこれら木俑を構造や着衣などの表現法から A 類・B 類の 2 種に分類した。以下それぞれの特徴を見てゆくこととする。

(1) A 類 (第 3 図 1~8・第 4 図 1<sup>5)</sup>)

A 類は、頭部から体部を一木で作し、さらに足部を別作りとし、両者をばねで接合する。体部は衣服を着けた状態に彫刻される。全体を精緻に作り、衣服は彩色あるいは彩画される。頭部は眼・鼻・口を彫り、頭髪・眉などは黒墨で描かれる。この型式のものとしては天星観 2 号墓出土俑 (1~3)、紀城 1 号墓出土俑 (4・第 4 図 1)、武昌義地 6 号墓出土俑 (5・6)、雨台山 186 号墓出土俑 (7・8) などがある。年代は紀城 1 号墓が前期後半、その他が中期前半である。以下、A 類の俑について、詳しく見てみたい。

腕部の形状は胸や腹部前で手を組む「拱手」(1・4・5・7)、腹部前で手を前方に伸ばす「伸手」がある(2・3・6・8)<sup>6)</sup>。拱手俑は上腕部から肘先部までを体部と同じ一木で作し出すが、伸手俑では肘先を別作りとする。このとき上腕部と肘先はほぼで接合される。拱手俑と伸手俑は天星観 2 号墓では 3 点ずつ、武昌義地 6 号墓・雨台山 186 号墓では 1 点ずつがセットで出土している。紀城 1 号墓は拱手俑のみが 2 点出土している。

衣服は全体の形状を彫刻した後、彩色または彩画される。形式は長衣で、帯が胸下に描かれ、1~3 ではさらに前方に垂れる帯が描かれている。衣服の文様は赤色と黄色で鳳凰文、円圈文、雲文を描くもの(2)、連続菱形文を描くもの(1・3)がある。その他黒色と無色を交互に配することで文様としているも

の(4~8)がある。また帯にかけた佩玉を描くものもある(1・3~6)。

(2) B類(第3図9~29 第4図2・3)

B類は頭部から体部、および上腕部までを一木で作るが、着衣は彫刻されず、また足部もほとんどが省略される。頸部から上は精緻に作られるが、体部の作りは粗雑である。このタイプでは布製の着衣をつけたもの(11~14)、その一部が残存したもの(26)があり、本来は絹や麻で着衣を作ることが基本だと考えられる。全体を彩色した例も少数あるが(29・第4図1)、その場合でも第4図1は着衣をつけている。またカツラをつける例が多いことも特徴である(11・13~15・18・21・25・第4図1)。立像が基本だが、座像も含まれる(9・10)。時期としては前期後半から後期前半に及んでいる。以下B類について詳しく見てみたい。

腕部は上腕部までを体部と一木で作り、肘から先を別作りとして、これを接合する例が報告されている(9・10・16・第4図1)。また上腕部に小孔が認められる例もあり、やはり腕部を別作りにしたと考えられる(15・18・21・23・26)。腕部が残っている立像では伸手(16)、片手は下げ、片手は前方に伸ばす(第4図1)といったような例があり、形は一定していない。座像では9のように手のひらを下にして左手は胸前に、右手は体から外に伸ばす、あるいは10のように左手は胸前に、右手は腹前にあり、器物を抱えているような形状のものがあるが、立像との間に共通点は見られない。九店墓地の報告では「多くの俑は腕や足がない」としており、腕部を作らない俑があったことも考えられる。同様の見解は馬山1号墓にもみられる<sup>7)</sup>。

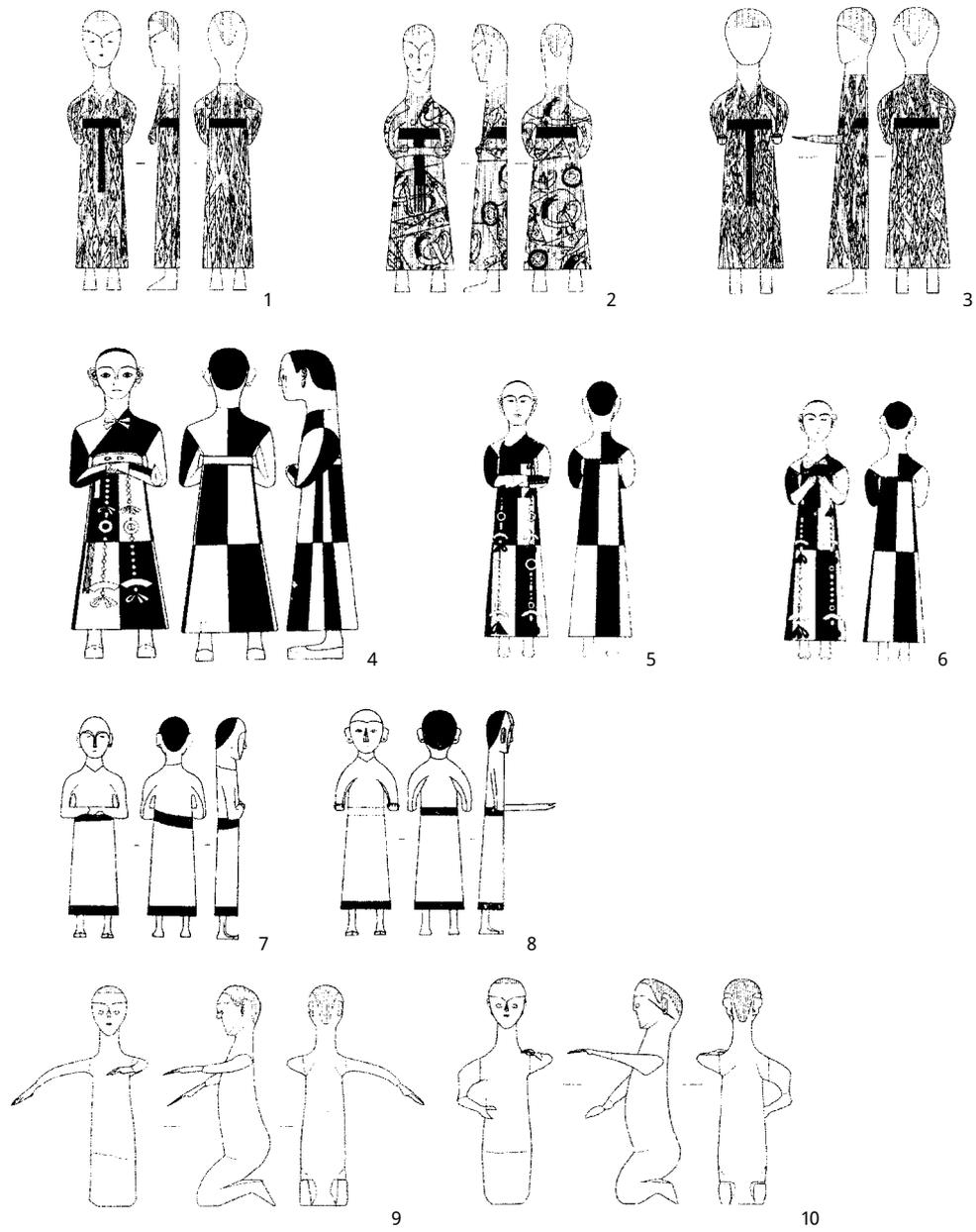
着衣は13や14のように刺繍をするものや、11~14のように帯を使うなどの例があり、実際の衣服に近づけたものとなっている。

以上、出土した木俑を概観してきたが、これを基に戦国時代荊州地区の木俑についてまとめてみたい。

まず荊州地区における俑の出現時期についてであるが、現状で年代がもっとも早い例は戦国時代前期後半になる。中国では殷代に玉などで人間型の俑が作られているが、出土例は多くはない。その後春秋時代と戦国時代の移行期になると陶俑や木俑が出現し、戦国時代になると長江中流域では木俑が、黄河流域では陶俑の報告が増加する<sup>8)</sup>。従って荊州地区における木俑の出現は、このような中国全体の俑の発展史と歩調を同じくするものと考えてよい。

木俑の出土状況で注目されることとして、中型墓における性別による副葬の

社会イノベーション学部



第3図 荊州地区戦国時代の木俑

荊州地区における戦国楚俑についての一考察



(1~3・9・10: 天星觀 2 号墓 4: 紀城 1 号墓 5・6: 武昌義地 6 号墓 7・8: 雨台山 186 号墓  
 11~13: 九店 410 号墓 14・29: 馬山 1 号墓 15: 雨台山 354 号墓 16・17: 溪峨山 1 号墓  
 18: 包山 4 号墓 19: 十里碑廠 1 号墓 20: 郭店 1 号墓 21: 包山 2 号墓 22: 九店 451 号墓  
 23: 包山 1 号墓 24: 車塢 1 号墓 25: 雨台山 532 号墓 26 九店 51 号墓 27: 九店 295 号墓  
 28: 大暉觀 6 号墓 29: 九店 632 号墓)



第4図 荊州地区戦国時代の木俑(2)  
(1: 紀城1号墓 2: 望山2号墓 3: 馬山1号墓)

有無がある。中期前半の中型墓では天星観2号墓、望山2号墓に木俑の副葬があるが、これら墓葬の被葬者はいずれも女性である。これに対して、同時期でやはり中型墓の望山1号墓から木俑が出土していないが、この墓葬の被葬者は男性であった。望山1号墓は未盗掘であり、なおかつ有機物の保存状況も良好であったことから、埋葬後に木俑が持ち去られた、或いは腐食した可能性は低く、当初から木俑は副葬されなかったと考えられる。また盗掘がひどく、保存状態が悪いため参考に過ぎないが、男性の被葬者が想定されている天星観1号墓からも俑は出土していない。このことは中期前半の中型墓以上の墓葬では、被葬者が男性の場合、俑の副葬が必ずしも必要とはされていなかったことを示唆している。それに対して被葬者が女性墓の場合には俑が副葬されており、俑を副葬するといった習俗の受容に男女差があったことを示している。しかし中期前半でも時代が下る包山2号墓からは俑が出土しており、性別による差異は解消されたと考えられる。

また本稿では荊州地区の木俑をその表現法の違いからA・Bの2種に分類した。この2種の木俑はいずれも前期後半から確認されており、また天星観2号墓では共伴もしている。従って現在の資料から見る限り、両者の出現時期について差異を認めることはできない。さらに全期間をとおして小型墓からはA類

・ B類が、また中期前半に限れば中型墓である天星觀2号墓からはA類・B類、望山2号墓・包山2号墓からはB類が出土しており、墓葬の階層による出土状況の違いも認められない。ただしA類は中期前半までしか出土例がないが、B類は後期後半まで継続して作られている。つまり現資料に基づく限り、A類・B類の間にその出現の時間差・階層差は認められないが、B類の方がより長期間作られたことになる。

A類は手や足を別作りとするものの、基本的には着衣をつけた姿を彫刻するものであり、その上で細部を彩色・彩画で表現する。それに対して、B類は頭部には細かな彫刻を施すが、体部以下の彫刻の工程は、彩色・彩画も含めて、かなり省略されている。その反面、B類では着衣が別に用意されるなど、木工以外との分業により俑が製作されている。つまりA類は木工のみで労力をかけ製作された作品であり、B類は分業により効率的に作られた製品ということになる。

また、B類で実際の衣服を縮小した着衣を着せることは、より実際の人間の姿に近づけようとする志向によるものと考えられる。B類では頭髪にカツラを使う例があることもこれと関連する。それに対してA類では手の形状がほぼ固定されるなど、形式的なありかたを示している。

従ってA類とB類の間には、前者が木製品としては精緻であるが、表現としては形式的なありかたを示すのに対して、後者は木製品としては省略化・分業化がはかられているが、表現としては人間的なありかたへの接近が見られる、という違いが認められるのである。

楚墓では生前の生活用品などが副葬されていることから、墓葬は被葬者が住まう場所であり、副葬品とはその被葬者が使う器物との想定ができる。そこから、副葬された俑は墓葬の被葬者に仕えるものとして作られたと考えられる。その俑を製作するにあたり、荊州地区では木製品としての精緻さよりも、より人間に近い形状が求められたのである。その背景には、被葬者の墓葬での生活がより現実に近いものとして認識されるようになり、生前の生活にできるだけ近い状態を保とうとする指向性が高まったことが想定される<sup>9)</sup>。

以上のような戦国時代の荊州地区における木俑のあり方を確認した上で、包山2号墓の俑について考えてみたい。

### 3 包山 2 号墓出土有腿俑の検討

包山 2 号墓出土有腿俑は、頭部に比べ粗雑な体部の作り、さらに体部に彩色や彩画を施さないなど、着衣を前提として製作されており、B 類に分類されると考えられる。頭髪や髭も彩画ではなく、カツラや付け髭を使っている点も、人間的な表現をもとめる B 類の特徴である。ただし脚部を実際に彫刻したり、つま先を別作りとして接合するなどの点は他の B 類には見られない特徴である。これはこの有腿俑が他の B 類の俑に比べ大型であることによるものであろう。

ところでこの有腿俑の特徴として、剣を持つことがあげられる。A 類では剣を持つ例はなく、B 類でもこのような例は少ない。しかも B 類で剣を持つ俑は包山 2 号墓出土無腿俑 (21)、4 号墓出土俑 (18)、さらに断片ではあるが 5 号墓出土俑に限られている。つまり現状では剣を持つ俑は包山墓地に特徴的な現象なのである。

包山 2 号墓を例としてその出土状況を見ると、出土した 12 体の木俑のうち 2 体が有腿俑であり、他の 10 体は無腿俑であった。無腿俑では 8 体に木剣が付属していた。この剣を持つ無腿俑は中央の棺室を囲む 4 室からそれぞれ 2 体ずつが出土している。さらに東室からは有腿俑 2 体も出土しており、無腿俑とあわせて剣を持つ俑 4 体が副葬されていたことになる。なお剣を持たない無腿俑は有腿俑と同じ東室から出土している。

以上の副葬状況から見て、これら剣を持つ俑は各槨室の警護者としての役割を持つと考えられる。包山 2 号墓では槨室ごとに異なった性格を想定していたことが指摘されており<sup>10)</sup>、それぞれの部屋を護ることを目的として、槨室ごとに剣を持つ俑を配したのであろう。そのなかで他の俑に比べ大型である有腿俑は、墓葬全体を護る役割を期待されていたと考えられる。

ところで戦国時代の荊州地区墓葬の代表的な副葬品に鎮墓獣がある。荊州地区の墓葬では、戦国時代にはいと大型墓から小型墓に至るまで階層に関係なく鎮墓獣が副葬されている。鎮墓獣の役割については諸説あるが、実用的な器物や観賞品のようなものとは考えらず、やはり墓葬を守護することを目的した辟邪の働きがあったとすることが最も妥当であろう<sup>11)</sup>。ところが包山 2 号墓ではこの鎮墓獣が出土していない。一般に鎮墓獣は木製品であり、腐食した可能性も否定できないが、他の有機物の出土状況から見てその可能性は低いと考え

られる。従って包山2号墓では墓葬の守護者として伝統的な鎮墓獣ではなく、帯剣の木俑が副葬されたことになる。

包山墓地では4基の墓葬が発掘されている。このうち時期的には最も早い1号墓では鎮墓獣と木俑が出土している。ただし木俑には2号墓のような剣は付属していなかった。これに対して2号墓に後続する4・5号墓からは鎮墓獣が出土せず、剣をもつ木俑のみが出土しており、2号墓と同じ状況を示している。ただし1号墓は盗掘を受けており、当初は剣が副葬され、その後失われた可能性がないわけではない。しかし南室では俑が盗掘を免れてまとまった状態で出土しているにもかかわらず、俑に付けたと考えられる剣が出土していないことから、やはり剣は当初からなかった可能性が高いと考えられる。また4号墓も盗掘を受けており、鎮墓獣が当初から副葬されていなかったとは言い切れない。ただし隣接する5号墓から鎮墓獣が出土していないことを考慮すると、4号墓にも鎮墓獣が副葬されなかった可能性は高いと考えられる。以上のことから、包山2号墓以後、包山墓地に埋葬された人々の間では墓葬の守護者が鎮墓獣から帯剣の木俑へ変化したと考えられるのである。このような変化は、現在のところ荊州地区では包山墓地にのみ見られる現象であるが、比較的統一性の高い荊州地区の墓葬において、包山2号墓のような階層の高い中型墓での変化だけに無視できない。

このような変化の背景には、墓葬に対する概念の変化があったと考えられる。すなわち、本来荊州地区では墓葬は呪術的な力を持つ鎮墓獣によって護られると考えられていた。しかし包山2号墓および包山墓地では鎮墓獣の持つ呪術的な力ではなく、人間の姿をした帯剣の俑によって墓葬を守護しようとしているのである。その背景には墓葬内のあり方を生前の生活にあわせていこうとする志向があり、そのため墓葬の守護を呪術的な鎮墓獣ではなく、実際の人間型をした俑に託したのであろう<sup>12)</sup>。

## おわりに

以上、包山2号墓の出土俑を中心に検討を加えてきた。包山2号墓で大型有腿俑が副葬された背景には、墓葬をより現実の世界に近づけようとする、葬送に対する概念の変化が想定されたのである。

包山2号墓が築造された戦国時代中期前半には、楚の墓葬からは水準の高い

工芸品が多量に出土している。しかし歴史的には秦の圧力が強くなりつつある時期でもあった。つまり一面において戦国楚の文化が爛熟してゆくが、反面、政治的な不安定さが増してゆく、そのような時代だったのである。そのなかで包山2号墓を築造した人々は、それまでの鎮墓獸ではなく、帯剣の俑に墓葬の守護を託したのである。そこに伝統的な価値観に安住できず、変化を求めた人々の姿を伺うことができるかもしれない<sup>13)</sup>。

- 1) 本稿での「荊州地区」とは、現在の行政区分では荊州市と荊門市をあわせた地域である。
- 2) 本稿では戦国時代を戦国時代を前期・中期・後期に分ける。大まかな実年代としては、前期は紀元前453年から350年、中期は紀元前350年から250年、後期は紀元前250年から221年を考えている。また戦国中期については紀元前300年を境として、それ以前を「戦国中期前半」、それ以後を「戦国中期後半」とする。さらにそれぞれの時期は「前段」と「後段」に二分する。
- 3) 松崎つね子「戦国楚の木俑と鎮墓獸について」(『駿台史学』第82号 1991年)  
于保田「楚俑」(『日本女子大学紀要 人間社会学部』7 1996年)  
于保田「楚俑」(『鹿島美術財団年報』通号14別冊 1997年)
- 4) 楚墓の分類については別稿を準備している。
- 5) 以下の文中で図版中の俑を引用する場合には、煩雑さを避けるため「第3図」を省略して表記する。
- 6) 武昌義地6号墓出土俑のうち6の俑は、実測図では胸前で手を組むように表現されているが、写真図版では腕部は前方へと伸びており、肘先の長さも胸前で組むには足りないようである。従って本稿ではこれを伸手俑として考えた。
- 7) 馬山1号墓からは散乱した俑の手足も発見されているが、報告者は別個の俑の存在を想定している。
- 8) 富田哲雄『陶俑』(中国の陶磁第2巻 1998年 平凡社 東京)
- 9) 松崎氏は主に鎮墓獸との関係や俑の形状・出土状況から、当初俑は「鎮墓神」と被葬者に仕える「侍俑」であったが、やがて現世を再現するために多様化していったとしている。俑の性格付けについては議論の必要はあるかと思うが、変化の方向性とその要因に関する重要な指摘である。松崎註3前掲論文参照。
- 10) 陳偉『包山楚簡初探』(1996年 武漢大学出版社 武漢)
- 11) 鎮墓獸の性格については吉松高敏氏がまとめている。但し、吉松氏は鎮墓獸を「人主」として考えておられる。  
吉松高敏「戦国楚の礼制の研究 - 戦国楚墓出土のいわゆる鎮墓獸をめぐって - 」(近藤喬一先生退官記念事業会『山口大学考古学論集 近藤喬一先生退官記念論文集』近藤喬一先生退官記念事業会 2003年所収)
- 12) 松崎氏は鎮墓獸の衰退が秦占領前の楚の領域ですでおこっているという、重要な指摘をされている。ただしその論拠となった鎮墓獸の出土状況については資料が増加しており、検証が必要になりつつある。
- 13) ただし生前の生活を俑で再現しようとする傾向は黄河流域でも認められる。例えば山東

### 荊州地区における戦国楚俑についての一考察

省章丘女郎山1号墓からは歌舞俑がセットで出土しており、その根拠となる。従って、墓葬に対する概念の変化は、楚に固有の問題ではなく戦国の各地で起こっていたとも考えられるのであり、この点については今後さらに検討が必要である。

済青公路文物考古隊綉惠分隊「章丘綉惠女郎山一号戦国大墓発掘報告」(『済青高級公路章丘工程段考古発掘報告集』1993年、齊魯書社所収)

#### 墓葬参考文献一覧

##### 紀城1号墓

湖北省文物考古研究所「湖北荊州紀城一、二号楚墓発掘簡報」(『文物』1999年第4期)

##### 雨台山墓地

湖北省荊州地区博物館『江陵雨台山楚墓』(1984年 文物出版社 北京)

##### 雨台山21号墓

湖北省博物館「湖北江陵雨台山21号戦国楚墓」(『文物』1988年第5期)

##### 車塋1号墓

荊沙市文物処「江陵車塋戦国墓清理簡報」(『江漢考古』1996年第1期)

##### 天星觀1号墓

湖北省荊州地区博物館「江陵天星觀1号楚墓」(『考古学報』1982年第1期)

##### 天星觀2号墓

湖北省荊州博物館『荊州天星觀二号楚墓』(2003年 文物出版社 北京)

##### 望山2号墓

湖北省文物考古研究所『江陵望山沙塚楚墓』(1996年 文物出版社 北京)

##### 包山墓地

湖北省荊沙鐵路考古隊『包山楚墓』(1991年 文物出版社 北京)

##### 九店墓地

湖北省文物考古研究所『江陵九店東周墓』(1995年 科学出版社 北京)

##### 武昌義地6号墓

江陵県文物局「湖北江陵武昌義地楚墓」(『文物』1989年第3期)

##### 溪峨山5号墓

湖北省博物館江陵工作站「江陵溪峨山楚墓」(『文物』1984年第6期)

##### 十里磚廠1号墓

荊門市博物館「荊門十里磚廠一号楚墓」(『江漢考古』1989年第4期)

##### 郭店1号墓

湖北省荊門市博物館「荊門郭店一号楚墓」(『文物』1997年第7期)

##### 大暉觀6号墓

湖北省博物館「湖北江陵太暉觀楚墓清理簡報」(『考古』1973年第6期)

##### 馬山1号墓

湖北省荊州地区博物館『江陵馬山一号楚墓』(1985年 文物出版社 北京)

(本稿は平成18年度科学研究費補助金基盤研究C「長江中上流域における秦漢帝国による地域統合の研究」(研究代表者小澤正人)による研究成果の一部である)